

# 「巨木学」とは

「巨木学」とは、巨木分類を確立し、巨木に正当な評価を与えるための基準を定める学問である。

たとえば、スギの場合、「天然杉」と「育てられたスギ」に分類される。キンモクセイとウスギモクセイはギンモクセイの変種に分類され区別されているが、ウスギモクセイの巨木を「○○のキンモクセイ」と呼んでいる場合が多い。これは、命名時代にウスギモクセイの認識がなかったからである。もともと、巨木を守り育ててきた我々の先達は、植物分類学とは全く無縁な人々であった。巨木分類では、両者を区別しない。マツ科の場合、クロマツやアカマツ、ゴヨウマツ等に分類されるが、マツを分類する場合、幹の太さだけではなく、人工的に美しく育てられた「仕立て松」が分類される。

そして、巨木学最大のテーマは巨木の評価である。これは簡単ではない。まず評価の基準となる公平な幹周測定法の確立が必須である。しかし、幹周の数字が評価の全てを支配するわけではない。それは、巨木によって様々な樹形、樹高、様々な要因が関与しているからである。これは、全国の巨木を数多く調査してきた結論である。幹周の数字を参考に、樹高・樹形や自然要因、歴史的背景、立地、花木の場合は花付きの良さ等を考慮して評価すべきである。

調査に当たって、巨木に関係している地元の人々や、役所の方等の協力も不可欠であった。1981年頃から20年以上全国の巨木を見て回った経験を生かし、2004年頃から2015年まで、足掛け12年、毎年全国を約4万キロ程踏破し調査した。撮影枚数は13万数千枚、記録帳は48冊。その膨大な資料とデータを基に「巨木分類」と「巨木評価」が始められたのである。しかし、残念ながら調査漏れや新発見が続いていく。全国の巨木愛好家の方々のお力をお借りして、この作業の完成を見た事を付け加え、紙上をもって感謝の意をお伝えしたい。



巨木調査の記録ノートと資料の一部。

## ●巨木学は、巨木の正当な評価をする事。



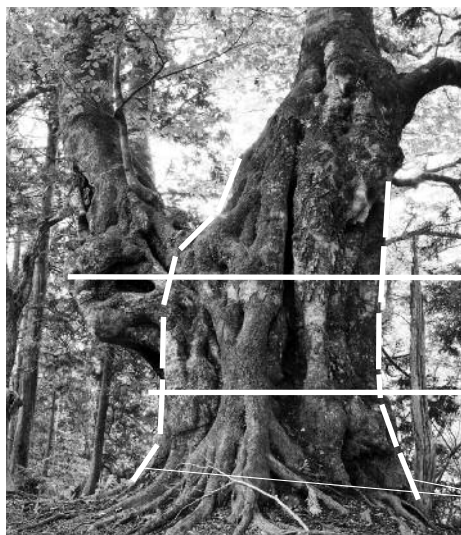
栢野の大杉(石川県) 巨木 DB 幹周 9.0m



杉坂峠の大杉(滋賀県) 巨木 DB 幹周 11.9m

上の二本の大杉の幹周は、右の杉坂峠の大杉の方が2.9mも大きい。これまでの評価だと、右がはるかに大きい事になる。しかし、普通に考えて、上部で分岐していても単幹大杉の方が、根元分岐の大杉より、はるかに巨大感があるのは明白だ。これまで、数字に誘導されて、大変な思いをして樹下に立ち、落胆した経験は筆者だけではないだろう。この問題を解決するために開発されたのがM式幹周測定法である。

M式幹周測定法では、栢野の大杉が幹周 M9.0m で杉坂峠の大杉が株周 M11.9 と評価される。これは、根元分岐の樹形を株周と表記する事で、幹の詰まったいわゆる単幹巨木と明確に区別する方法を採用した結果である。



巨木 DB の測定位置

M 式測定位置

主幹のライン

左は秋田県の「白岩岳のブナ」で、幹周 8.6m で、日本一のブナと騒がれ、バスまで押寄せた。しかし、その後全く騒がれなくなった。数字程の感動がなかったからだ。その数字は、地上 1.3m 地点を凹凸に沿って測定して得られた数字で、分岐によって大きく膨らんだ部分だ。この測定方法はこのように実感される大きさを正確に表現しない。(環境省の測定方法では、巻尺をピンと張ってというが、なぜか現場では凹凸に沿って測定している。理由は今も不明だ)

実際の幹の太さは、根元の最もくびれた部分で、M式では幹周 M5.5m(0.3m)。このブナでは妥当な数字であろう。